

OED Online に見られるワードペアについて

青 木 繁 博

Word Pairs Found in the *OED Online*

Shigehiro Aoki

1. はじめに

筆者は長年ワードペアと呼ばれる言語現象を研究しているが、本論文では *OED Online* に見られる慣用的な英語ワードペア（約1,900表現）を対象とし、その初出年や使用年数などに関する調査を行った。当然のことながら、この中には一時期のみ使われた表現から今に至る長い間使われている表現まで、多様なペアが含まれている。しかし本論文ではまとまった数を扱うことにより、上記の多様性を越えてワードペア全般に共通する特徴が見られることになり、さらには、これまで指摘されることのなかったワードペアのいくつかの局面が示されることになる¹。

2. 本論文における研究対象について

2.1. ワードペアとは何か、その用語と定義に関する問題点

本論文におけるワードペアとは、概ねandなどの接続詞によって2語が結び付けられたものを指している。こうした表現は、「ワードペア」（谷 2003,2008; Katami 2009; 青木 2014など）のほか、「binomials」（Gustafsson 1975,1984; Koskeniemi 1983）、「ペアワード」（青木 2007）など様々な用語で示されてきた。また以下のように、その特徴的な面を示すことばを含めて定められるケースも多い。

- (1) a. 語順の固定性：irreversible binomials (Malkiel 1959, Cooper and Ross 1975)
- b. 頻度の高さ・繰り返し：repetitive word pairs (Koskeniemi 1968, 1975; Kikuchi 1995; Miwa and Li 2003)
- c. 2語の意味関係（特に同意性）：synonymic pairs (Shibata 1958)、synonymous pair-words (Yamaguchi 1971)
- d. 意味内容の冗長性：die tautologischen Wortpaare (Leisi 1947)

これらのうち、語順の固定性については、慣用表現などに多い2語の語順が決まっているペアを対象とする考察が行われている。Malkiel (1959) や Cooper and Ross (1975) をきっかけに、それらの語句

の先・後を決める法則にはどのようなものがあるかといった点がしばしば論じられてきた。これに対してMollin (2012, 2014) は、そうした法則云々以前に、そもそも語順の固定性という線引きは可能かという問題提起をしているようである。Mollin (2014) では、“語順が決まっている”とされるペアの多くが、実際には逆の語順でもよく使われていることをBNCコーパスから得たデータを使って示している。Mollinの言う「(不)可逆性」“(Ir) reversibility”という括弧付きのことばは、ワードペアの固定性を一旦留保する見立てをよく表していると思われる。

上に述べた語順の固定性を前提とする観点とそうでない観点との間の議論にとどまらず、同様のことはワードペアの他の特徴についても起こり得ると考えられる。例えば繰り返しを前提としてワードペアを定義するならば、頻度が高くないペアがあったとき、どんなに重要な意味を持つものでも論じられることはないであろう。さらに本節の冒頭に示した「andなどの接続詞によって2語が結び付けられたもの」という簡単な定義ですら、接続詞が省略されたペアや、3語以上が結び付けられた表現など、そこからこぼれてしまうような例については枚挙に暇がない。一見ごくありふれた表現のように見えるワードペアだが、それを研究対象として過不足なく規定するには元々難しい面があったのではないかと考えられる。

このような状況を踏まえて、青木 (2015以降) では、認知言語学的な観点から、ワードペアを「[A and B]をプロトタイプとし、その周辺にゆるやかに集まる集合体である」(青木 2017: 87) と定めている。中心となるべき、ある種の型が存在することは認めつつも、必ずしも境界が明確でないものとして包括的にワードペアを捉えようとする試みであった。これですべてが解決されるわけではないが、上述のような観点の違いから生じるワードペアの定義付けの問題をひとまず回避し、ワードペアの幅広い用法を論じることを可能にしたと言えるのではないだろうか。

本論文では、その方向に沿って、ただし調査の進め方の都合で一部は修正しつつ (修正点については次節で詳しく説明する)、幅広くワードペアの例を収集し分析を加えたいと考える。

2.2. 本論文で研究対象とするワードペアの範囲

OED Online の検索機能 (Advanced search) でandを検索すると、見出し (Headword) に260例、小見出し (Lemma) に1,758例という結果が表示される (2017年9月13日時点)。しかしこの数がそのままandを用いたワードペアの数ということではない。検索結果の中には、接続詞andそのものや、明らかに別の語法のものも混ざっている (*and odd*, *and other*, *and so on* など)。また、検索結果として示された1つの項目の中に複数のペアが含まれていることがある (例えば “*all, adj., pron., and n., adv., and conj.*” 中の小見出しには、*all and odd*, *all and singular*, *all and some*, *all and sundry*, *all and whole* (also *hale*) といった複数のペアが含まれている)。こうした検索数を左右するであろう問題に対しては、結局は目視して確認していくほかはなく、最終的には手作業で集計する形となった²。

さらに以下は、いわばペアかどうかの境界線上にある例で、特に注意が必要である。

- (2) a. and以外の等位接続詞 (orなど³) が用いられているもの
- b. 等位接続詞以外で接続されたり、接続詞が省略されているもの
- c. 語よりも大きな単位が結ばれたもの ([単語 and 単語]ではなく、[語句and語句]など)
- d. 2項目ではなく、3項目以上が結ばれたもの (例えば *morning, noon, and night* や *north, south, east, and west* など)
- e. ことわざなどによく見られる、長いフレーズ、言い回し、文など

できるだけ多くのペアの例を収集できればよいとも思われるが、反面、闇雲に例を集めても、信頼できない集計結果にもなりかねず、それでは意味がないとも考えられる。そこで本論文では基本的な方針として上記(2)については除外することとし、それでも判断が難しいケースがあれば、一定の基準を設けて個別に対応することとした⁴。

なお *OED Online* を調査の対象として選んだことについては、以下の点を総合的に考慮し、本論文の目的に合致すると判断した。*OED Online* を用いるメリットとしては以下の3点が挙げられる。1) 特定の時代やジャンルにとらわれず広くペアの例が収集できること、2) 各用例の使用年代が明示されていること、3) 引用例が文で、ある程度の文脈が得られ、意味が取りやすいこと。逆にデメリットとしては、1) 理論的には、より広範なテキストから例を集めることも可能なこと、2) 一般に辞書に見られるペアは定型的なものが多く、新奇なペア・創造的なペアは少ないこと、3) 辞書の記載事項に十分な信頼が置けるか検証すべき場面もあり得ること、4) 収録された用例に時代的・文献的偏りがある点がしばしば指摘されること、が考えられる。特にデメリットの3点目について、項目によっては *OED* の初版の頃（概ね1900年前後）以降は更新されておらず、それより後の用例は存在しないのか、それとも単に採録されていないだけか、判別しかねるケースもあった。このことは年代等を見る際に大きな問題にもなり得るが、本論文ではまとまった数量を扱うことで、ある程度は相殺されるのではないかと考える⁵。

3. 分析・考察

前章で述べた方針に基づいて収集されたワードペアは1,901ペアであった。ここではまず *OED Online* に見られるペアの全般に関する分析を2点を挙げる（1点目はそれらの初出年についての分析、2点目はそれぞれのペアの使用期間についての分析）。次に廃語になったペアに焦点を当て、今も使われているペアと比較して何らかの相違が見られるかといった点を考察する。

3.1. ワードペアの初出年について

図1は *OED Online* から引用し、本論文で使うため一部に修正を施した“Timeline of entries in the OED”である。これは *OED Online* の全エントリー項目にあるプロフィール（Entry profile）中に表示されるもので、その時点で *OED Online* に含まれるすべての見出し語句の初出年を示すヒストグラムである。図2は、これに模して筆者が作成した全1,901ペアの初出年の分布図で、1000年から2009年までの10年刻みとなっている。

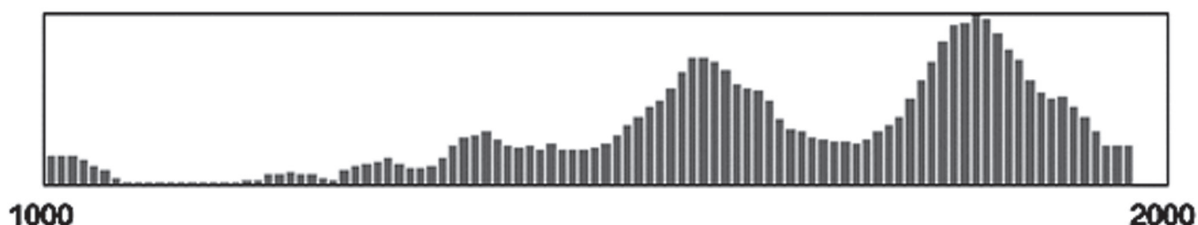


図1：OED Onlineから引用した、全語句の初出年代分布図

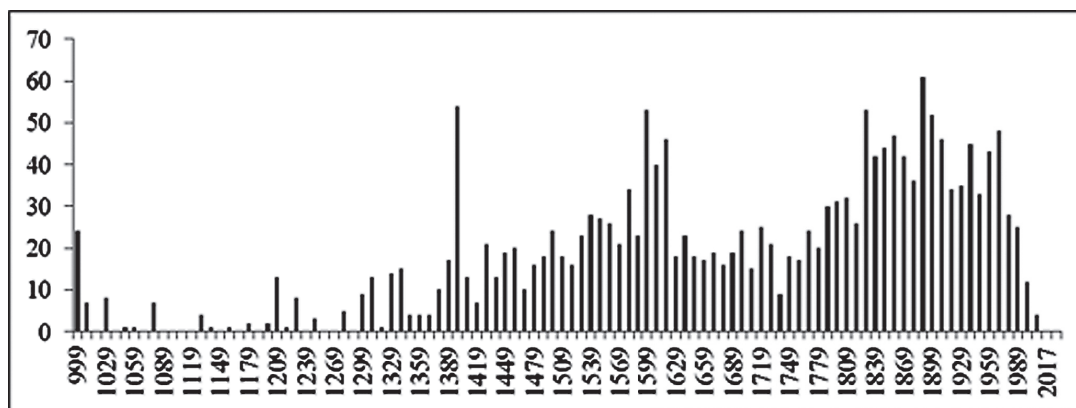


図2：OED Onlineにおけるワードペアの初出年代分布図

図2（ワードペアの分布図）においては1390年代が突出しているが（a1400 [1399年]の*Cursor Mundi*が初出というペアが多かったようだ）、その点を除けば、1600年前後と1900年前後に2つの山がある点など、形としては*OED Online*のすべての語句のヒストグラムとよく似たものとなっている。

3.2. ワードペアの使用年数について

次にペアの使用年数について分析する。1例しか用例が挙げられていないペア（299ペア）と、2例以上挙げられてはいるが同一テキストからのもの（7ペア：*how and about*, *point(s) and blank*, *shout and hoyes*, *to stave and tail*, *trace and rase*, *for year and year*, *riff and raff*）を1,901ペアから除いた1,595ペアについて、単純な計算ではあるが、初出年から最終年の間を算出したものを総合すると、平均値は224年（小数点以下四捨五入）であった。

使用年数の長いものに目を向けると、*hither and thither*, *night and day*, *to go and come*などの10ペアは、使用年数が1,000年を超えていた。逆に使用年数が10年に満たないペアも多数あったため（47ペア）、平均値そのものに意味があるかには疑問もあるかもしれない。なお最終の例が本当に最後の例か（それとも辞書に採録されていないだけか）といった問題が存在することについては既に述べた。

また、後述する「廃語になったペア」に限っての使用年数も求めたところ、平均値は212年となり、必ずしも全体の数値と大きく変わるほどではなかった。なお廃語になったペアは約33%が100年以内、約55%が200年以内、約76%が300年以内で廃語になっていた。

ここで示したワードペアの使用年数が長いのか短いのか、その評価については、ワードペア以外の語句との比較を通じてはじめて明らかになるものであろう。しかし他の諸表現を含めてこのようなデータが出されたことは今までほとんどなかったのではないかと思われ、総合的に見て使用年数の問題は今後の課題であると考えられる。

3.3. 廃語になったワードペアについて

続いて、ワードペアの中でも「廃語」（廃意あるいは廃用といった訳語もある）になったものについて考察するが、本論文では*OED Online*でのそれぞれの項目に“*Obs.* [Obsolete]”のラベル、または“†”マークが見られるものを廃語としてカウントしていく⁶。

前述したように、*OED Online*の機械的な検索結果の中にはペアとは言えない例も多く含まれており、それはObsolete等の条件を付して検索した場合も同様であった。従って、ここでもやはりペアとは言えないものを取り除く作業を経て、388ペアを廃語になったペアと認定した。それらについて、見出し・

小見出しにおける内訳や割合は以下の通りであった。

- (3) 見出し・小見出し合わせて1,901ペア中、廃語になったペア388ペア (20.41%)
 - a. 見出し242ペア中20ペア (8.26%)
 - b. 小見出し1,659ペア中368ペア (22.18%)

なお *OED Online* の全語句（見出し）は2017年9月13日時点では以下の通りであった。

- (4) *OED Online* の見出し279,917項目中、廃語になった語句52,814項目 (18.87%)

これらは単純には比較できないかもしれないが、それでも両者を比べると、ワードペアは、総合的に見て単語と比べて廃語の割合が際立って高いわけではなく、せいぜいやや高いといった程度である。さらに、見出しのみで比較した場合は、むしろワードペアの方が廃語になったものが少ないという結果になっている。この点については、*OED Online* においては、廃語になった単語の多くは見出しとして立てられているが、ワードペアを含む複数語からなる語句については、廃語になったものは採録されにくいといった傾向があるのかもしれない。

4. むすび

慣用句なども多く含まれるためか“古い表現”のような印象もあるワードペアだが、少なくとも今回調査した限りでは、一般的な単語と比較して初出年が必ずしも古いわけではなく、使用年数も短いわけでもなく、また、廃語になっている割合が特段に大きいとも言えなかった。もちろん、個別のペア表現はそれぞれの理由や事情によって生み出され、変化し、廃れていくものではあるだろうが、ワードペアという表現の総体としては、英語の歴史を通じ現在に至るまで広く使われていると結論付けられるのではないだろうか。

注

¹ 本論文で示すデータは概ね2016年11月12日から2018年2月22日までにアクセスした結果に基づいている。*OED Online* は随時更新されており、上記期間中にも数回のアップデートが実施されているため、一部の語句についてはペアの数や使用年などの点で整合しないところが生じている可能性は排除できない。また、今後アクセスする時期によっては異なる結果が示されることがあり得る。

² 本論文では、初出年代等については、それぞれのペアが見出し・小見出しとして示されている箇所を参照しそれを採用しているが、ペアを個別にQuotation Search（引用文そのものの検索）で検索した際には、それとは異なる年代の例（より早い年代の使用例など）が示されることもある。しかし、Quotation Searchの検索結果の中には、明らかに意味・用法が異なっていたり、おそらく偶然にそれら2語が並んでいる例など、当該のペアとみなせるか疑問であるケースも多々ある。この点を踏まえて、実質的な年代分布とは異なる面もあるかもしれないが、本論文ではあくまで *OED Online* の見出し・小見出しとしてのペアを扱うという観点に立ち、その範囲での集計作業（すなわち見出し・小見出しとしての年代を優先）を進めることとした。まずは本論文では約1,900のペアを総じて記述することを目指し、個別のペアを対象とする詳細な年代特定などは、今後の課題としたいと思う。

³ orなどが用いられた「and以外の接続詞からなるペア」については、筆者は将来的にはそれらも含めた総合的な考察を行いたいと考えているが、*OED Online* でのワードペアの分布に関しては接続詞の違いは大きな差を生じさせると言うことができる。例えばorのペアは、見出しでは10例が示されるのみであり、見出しだけで200余例が挙げられているandのペアとは扱いが大きく異なるようである。この点を踏まえて、本論文ではand以外の接続詞からなるペア

については一旦の保留とし、後述の「andのペアのヴァリエーションの一種」として認める以外は、集計などからは外して進めることとした。

- ⁴ 一定の基準とは以下のa～eの5項目である。なお今回の調査では、見出し・小見出しとして立てられているペアを収集しているため、全文検索等では発見可能な語句が、ここでの研究対象からは外れている場合もあり得る。
- 本論文はandのワードペアを主に扱うが、まずは見出し・小見出しでandのペアの形があるかが基準となる。引用例の中で別の接続詞（orなど）が見られるケースもあるが、これについてはandのペアのヴァリエーションの一種と解釈し、研究対象に含めることとする。
 - 2語以上同士が結ばれたものや、ペア（2項目）ではなく3項目以上が結ばれたものは、本論文の研究対象からは除外する。ただし例外的に、2語以上になるもののうち、前置詞付きのペア（[前置詞+A and B]）と、冠詞付きのペア（[冠詞+A and B]）の2者については、厳密に言えば語数が多すぎるという見方もあるかもしれないが、一つ一つ用例等確かめた上で、今回は研究対象に含めることとした。
 - 小見出し等に形は提示されているが、引用の例が1つも挙げられていないものについては、使用年代がわからない（年代の比較や集計ができない）ため、本論文では除外する。
 - ワードペアは2語からなる以上、2つのエントリーで（それぞれの単語の見出しの下で）、いわば重複して掲載されていることも多い。同一のペアを指していることが明らかな場合には年代等は1つにまとめたが、そうではなく、意味が異なっていたり、使用時期が明白に異なるケースなどにおいては、別のペアとして集計したものが若干例ある。
 - 同じ形のペアが1つのエントリー内で複数見られるときは、単語に複数の意味があるように、ペアにも複数の意味・用法があると考え、基本的には1つのペアとして扱う（使用年代もまとめて集計する）。1つにするのが難しい場合（異綴の有無、ハイフンのあるなし、動詞と名詞など異なる品詞で用いられるケースなど）は、用例等を見て適宜判断した。
- ⁵ ワードペアがよく使われる文脈としては、法律用語で（Gustafsson 1984）、あるいはロンドン方言などに特徴的な rhyming slangで（青木 2017）、作品タイトルで（青木2018）など、具体的な場面が挙げられることもある。実際、今回 *OED Online* を使って調べた中でも“Law” “Brit”などの文脈や地域等を示すラベルが付いたペアも多かったが、本論文では特定の文脈等に限定せずに広範にペアを考察することが主旨であるため、それらについては特に言及しない。
- ⁶ 廃語の標識が付いたペアの中にも、例えば“*Obs. exc. dial.*”（廃語、ただし方言としては残っている）といった、廃語かどうかの境界にあたる例も散見された。本論文では、このような場合も一応は廃語に含めて数え、その数値を提示している。

コーパス

OED Online. <http://www.oed.com/>

参考・参考文献

- 青木繁博（2007）「中世英語散文の文体とペアワード－Julian of NorwichとMargery Kempe」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第37号、59-72.
- （2014）「中英語散文におけるワードペアとメタファー：認知言語学的アプローチ」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第44号、1-8.
 - （2015）「特定の文学ジャンルにおける中英語ワードペアのヴァリエーション」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第45号、45-55.
 - （2016a）「英語ワードペア表現の5つのタイプと意味変化」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第46号、79-88.
 - （2016b）「*bread and butter* の意味消失：慣用的な英語並列表現が意味変化するプロセスについて」『日本認知言語学会論文集』第16号、453-458.
 - （2017）「Rhyming Slangとワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第47号、85-96.
 - （2018）「ベストセラー作品のタイトルにおけるワードペア」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第48号、113-120.

- Cooper, William E., and John Robert Ross (1975) "World Order." *Papers from the Parasession on Functionalism*. Eds. Robin E. Grossman, L. James San, Timothy J. Vance. Chicago Linguistic Society, 63-111.
- Gustafsson, Marita (1975) *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto.
- . (1984) "The Syntactic Features of Binomial Expressions in Legal English." *Text* 4, 123-141.
- Katami, Akio (2009) "Word Pairs in Middle English Mystic Prose of the Fourteenth Century." 『埼玉学園大学紀要』経営学部篇 9, 177-189.
- Kikuchi, Kiyooki (1995) "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.) 42, 1-17.
- Koskenniemi, Inna (1968) *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto.
- . (1975) "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 212-218.
- . (1983) "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday, 4.1.1983*. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 77-84.
- Leisi, Ernst (1947) *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner.
- Malkiel, Yakov (1959) "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8, 113-160.
- Miwa, Nobuharu and Su Dan Li (2003) "On the Repetitive Word-Pairs in English—With Special Reference to W. Caxton—." 『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』58, 49-66.
- Mollin, Sandra. (2012) "Revisiting Binomial Order in English: Ordering Constraints and Reversibility." *English Language and Linguistics* 16.01, 81-103.
- . (2014) *The (Ir) reversibility of English Binomials: Corpus, Constraints, Developments*. Studies in Corpus Linguistics 64. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Shibata, Shozo (1958) "Notes on the Vocabulary of *The Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al. Tokyo: Kenkyusha, 209-220.
- Shimogasa, Tokuji (1997) "Binomial Expressions in *Le Morte Arthur*." *Bulletin of the Faculty of International Studies, Yamaguchi Prefectural University* 3, 59-74.
- Stone, Robert Karl (1970) *Middle English Prose Style: Margery Kempe and Julian of Norwich*. The Hague: Mouton.
- 須部宗生 (1999) 「語順固定の英語対句表現の一考察」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』1, 39-68.
- 谷明信 (2003) 「初期中英語the 'Wooing Group' のWord Pairsの用法とその特徴」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊, 19-24.
- . (2008) 「Chaucer の散文作品におけるワードペア使用」『ことばの響き—英語フィロロジーと言語学—』今井光規・西村秀夫 (編). 東京: 開文社, 89-116.
- 渡辺秀樹 (1994) 「同意語並列構文の系譜」『英語青年』140.6 (1994年9月号), 285-287.
- Wilson, R. M. (1956) "Three Middle English Mystics." *Essays and Studies*. New Series 9, 87-112.
- Yamaguchi, Hideo (1971) "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号, 1-44.